様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５６０３４８

研究課題名（和文）市民・患者と医療多職種の”カフェ型”ヘルスコミュニケーションモデルの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of Cafe-style health communication model among citizens/patients and health professionals

研究代表者
孫　大輔（SON, Daisuke）

東京大学・医学（系）研究科（研究院）・講師

研究者番号：４０６３７０３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：カフェ型ヘルスコミュニケーションの参加者にどのような学習プロセスが起きているか探索した。カフェ参加者189名の事後アンケート記述の質的分析から「視座の変容」や「自己省察」など変容的学習に関する概念が抽出された。その結果をもとに、変容的学習等の概念に関する計72項目からなる質問紙を作成しウェブ調査を行い、共分散構造分析によって分析した。141名のデータから（有効解答率39.5%）、対話において「多様な価値観と遭遇」したり「当事者のナラティブ」を聴くことで参加者に「自己省察」や「パースペクティブ変容」などの変容的学習が起きていた。その結果、専門職の「患者・利用者への意識変容」などにつながっていた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to explore the process of learning in participants of Cafe-style health communication in the light of transformative learning. The preliminary qualitative analysis revealed that participants experienced “perspective transformation”, “self reflection”, etc. Based on the results, we conducted a psychometric analysis of a web-based questionnaire consisting of 72 items for participants of Cafe-style health communication, and studied the relationships between concepts. The questionnaire response rate was 39.5% (141/357). Structural equation modeling (SEM) analysis revealed that transformative learning had occurred. “Perspective transformation” was related to “understanding of others”. In health professionals, it was related to “consciousness transformation about patients and clients.” On the other hand, “formative learning” was related to “improvement of communicative and critical health literacy” in citizens and patients.

研究分野：ヘルスコミュニケーション

キーワード：カフェ型ヘルスコミュニケーション　ワールドカフェ　共分散構造分析　変容的学習

１．研究開始当初の背景

近年、理想的な医療の提供やヘルスプロモーションにおいて、コミュニケーションの方法論がますます重要視されており、そのような健康や医療に関する医療提供者と医療消費者間でやりとりされるコミュニケーションは、総じて「ヘルスコミュニケーション」と呼ばれている。しかしながら、医療機関におけるヘルスコミュニケーションには、時間の制約、通常とは異なる制度的会話、情報・立場の非対称性などさまざまな限界がある。このようなヘルスコミュニケーションにおける課題を解決する一つの選択肢として、ワールドカフェのような「カフェ型」の対話的アプローチによるヘルスコミュニケーション活動がある。小グループでの対話のデザインを組み込んだカフェ形式での健康や医療に関するコミュニケーション活動を、ここでは「カフェ型ヘルスコミュニケーション」と呼ぶ[1]。

研究者は、2010 年 8 月より医療や健康をめぐる話題について市民・患者と医療・介護・福祉系専門職がともに参加して対話を行い、互いに学び合うカフェ型ヘルスコミュニケーション活動「みんくるカフェ」を行っている。カフェ型の対話的アプローチは、参加者全員での自由で主体的な対話が行われること、専門家と非専門家や異なる職種間など越境的な参加者の間でも対話が可能になること、などを特徴とする。しかしながら、こうしたカフェ型の対話的アプローチが参加した個人にどのような効果を及ぼすのか、その効果を検証した報告は少ない。

２．研究の目的

本研究では、カフェ型ヘルスコミュニケーションに参加した市民・患者および医療系専門職においてどのような学習プロセスが起きているのか、また学習効果との関連を探ることを目的とした。

３．研究の方法

2011 年 10 月～2013 年 5 月に東京都内にて実施した計 12 回の「みんくるカフェ」参加者のアンケートをもとに、参加者の学びに関する記述の質的分析を行った。アンケートは毎回カフェ終了時に行われたもので、記名の有無は自由とした。対象者はのべ 189 名であった。

また変容的学習の枠組みにそった計 72 項目の質問紙を作成し、2010 年 8 月より 2013 年 9 月まで開催した「みんくるカフェ」関連企画、計 33 回の参加者 357 名にウェブアンケート調査をメールにて回答を依頼した。統計解析ソフト SPSS 22.0, Amos 22.0 を使用し、変容的学習に関する質問項目に関して、探索的因子分析を行った。また共分散構造分析によって概念間の関連を検討した。本研究は、聖路加国際大学倫理審査委員会の承認（承認番号 13-058）を得て行った。

４．研究成果

189 名の事後アンケート記述から、学びに関する自由記述の質的分析を行い、カテゴリーを抽出した。参加者の内訳は、医療系専門職が 93 名（49.2%）で、市民・患者が 96 名（50.8%）であった。医療系専門職と市民・患者に共通する学びとして、「視座の変容」「自己省察」「多様な価値観との遭遇」「当事者のナラティブ」「越境的対話の意義」「テーマに関する洞察」「行動への動機づけ」のカテゴリーが抽出された（表 1, 表 2）。カフェ型ヘルスコミュニケーションにおいて変容的学習のプロセスが起きうることが示唆された。

表 1. 医療系専門職の学び（質的分析）

カテゴリー	テーマ	代表的な記述	記録単位数
変容的学習	視座の変容	・医療者と患者さんの間の落差の話は衝撃だった ・さまざまな視点からの意見を聞け、また違った価値観を得ることができた ・立場が異なる人との対話を通して、多様な視点や価値観を得ることができた	8
	自己省察	・自分の分野に偏った考え方をしていたことに気づいた ・偏見やスティグマが、自分の中にもあったと気づいた ・まったく当事者の立場になって行動できていなかったことに気づいた	10
対話における経験	多様な価値観との遭遇	・同じ話題を共有しても、それぞれ感じることはさまざまであった ・テーマに関する認識が人によってばらつきが大きかった	4
	共通性の確認	・参加者の共通認識が非常に近いことに気づいた	2
	当事者のナラティブ	・実際に経験されている方から話を聞けたのが良かった ・当事者の方の話を聞け、問題についてさらに認識できた	3
	越境的対話の意義	・一般の方と対等な関係を保ちながら対話することの重要性を感じた ・対話によって、本当に地域や多職種や社会全体で考えていくべき問題であると感じた	7
テーマに関する学び	テーマに関する洞察	・コミュニケーションは、医療者-患者に限らず、常日頃すれ違うものだと気づいた ・良い死を考えるためには、一緒に生きている人との関係が重要だということに気づいた ・介護は本当に大変なことなのだと改めて理解した	20
動機づけ	行動への動機づけ	・声にならない声を、どうしたら看護者側として社会に発信し、還元できるかということを常に考え続けたいと感じた	3

表 2. 市民・患者の学び（質的分析）

カテゴリー	テーマ	代表的な記述	記録単位数
変容的学習	視座の変容	・死ということを通して、何が大切なのか、自分が今幸せかなど、生きることについて深く考えることにつながった ・いろんな分野の方と対話することで、新たな気づきが得られた	9
	自己省察	・自分の現状や価値観をあらためて知った ・知らず知らずのうちに人を傷つけていないかと感じた	5
対話における経験	多様な価値観との遭遇	・小さなことでもいろんな角度から見ると、さまざまな意見があることに気づいた ・同じテーマでも、参加者によって意見にばらつきがあることを知った ・患者と医療従事者の考え方が違うことに気づいた	8
	当事者のナラティブ	・介護を実際にしていた方の話を聞いて、大変さを改めて知った ・現場の医療者の声を聞くことで、リアルに何が起きているのかを知り、とても参考になった	3
	越境的対話の意義	・さまざまな人と多様な意見を共有することが本当に大事だと感じた ・いろんな職業の枠を超えて視点を共有することの意義を感じた	16
テーマに関する学び	専門的知識の獲得	・延命処置やエンディングノートに示す現実的な側面が勉強になった	3
	テーマに関する洞察	・対等な良いコミュニケーションをとることの難しさを知った ・死を前向きにとらえたり、もっとオープンに話をしたりするべきだと感じた	23
動機づけ	行動への動機づけ	・つながり協働するなどして実効性のある何かができる、というインスピレーションを得た ・自分も患者としてやれることがあると感じた	3

357 名に依頼したウェブ調査では、医療系専門職と市民・患者を含む 141 名より回答を得（有効回答率 39.5%）、変容的学習に関連する概念を共分散構造分析によって分析した。統合モデルの分析によって、対話において「多様な価値観と遭遇」したり「当事者のナラティブ」を聴くことで、参加者には「自己省察」や「パースペクティブ変容」などの変容的学習が起きていた（適合度指標：GFI= .794、AGFI= .756、CFI= .927、RMSEA= .058）（図 1）。変容的学習プロセスは、直接「パースペクティブ変容」に至るパスと、「自己省察」から「混乱的ジレンマ」を経て「パースペクティブ変容」に至るパスが認められた。変容的学習の帰結として、立場の異なる「他者への理解」や、専門職の「患者・利用者への意識変容」が起きていた。また市民・患者においては主に「形成的学習」により「伝達的・批判的ヘルスリテラシーの向上」が起きていた。

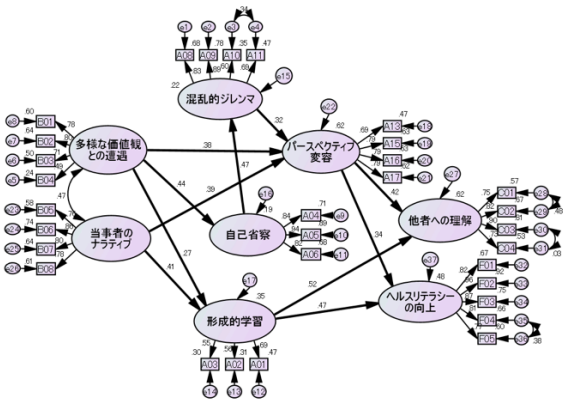

図 1. カフェ型ヘルスコミュニケーションにおける参加者の学習プロセス

カフェ型ヘルスコミュニケーションにおいて、多様な価値観と遭遇したり当事者のナラティブを聴いたりすることで、参加者には「変容的学習」が起きており、その帰結として、立場の異なる他者への理解や、専門職の患者・利用者に対する意識変容が起きていること、また市民・患者においては主に「形成的学習」により伝達的・批判的ヘルスリテラシーが向上していることが明らかとなった。市民・患者と医療系専門職の双方に変容的学習および相互理解を促すことができる場として、カフェ型ヘルスコミュニケーションが今後さらに普及することを期待したい。

文献

1. 孫大輔. 新しい患者-医療者関係の構築に向けて　カフェ型ヘルスコミュニケーションの可能性. 日本ヘルスコミュニケーション学会誌 4(1): 13-17, 2013.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 孫大輔：省察的実践家入門 対話の場作りをすすめるファシリテーターと省察的実践（総説）. 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 査読有, 36 巻 2 号: 124-126, 2013. http://doi.org/10.14442/generalist.36.124

2. 孫大輔, 菊地真実, 中山和弘：カフェ型ヘルスコミュニケーション「みんくるカフェ」における医療系専門職と市民・患者の学び. 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌,査読有, 5 巻 1 号: 37-45, 2014. http://healthcommunication.jp/journal/vol005no01/vol5_p37-45.pdf

3. 孫大輔：【住民が主役のコミュニティづくり-作業療法士ができること】カフェ型ヘルスコミュニケーションによる市民参加型の健康づくり 対話が可能にする変容的学習. 臨床作業療法, 査読無, 12 巻 1 号: 15-19, 2015. http://www.sharaku.co.jp/seikaisha_pdf/rinsho/vol12_1.pdf

〔学会発表〕（計５件）

1. 孫大輔：カフェ型ヘルスコミュニケーション「みんくるカフェ」による学びと場の特徴（ポスター）. 第 5 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会. 岐阜. 2013 年 8 月 9-10 日.

2. 孫大輔, 中山和宏：医療者と市民・患者のカフェ型ヘルスコミュニケーションは相互理解を進めるか？ −変容学習の共分散構造分析（口演）. 第 5 回日本プライマリ・ケア連合学会学術集会. 岡山. 2014 年 5 月 11 日.

3. 孫大輔, 中山和宏：医療系専門職と市民・患者のカフェ型ヘルスコミュニケーションによる変容的学習のプロセス（口演）. 第 6 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会. 広島. 2014 年 9 月 19 日.

4. Son D, Nakayama K: Transforming health professionals' attitudes toward patients and clients by café-style health communication (Short Communication). Association for Medical Education in Europe (AMEE) 2014, Milan, Italy, 2014.8.30-2014.9.3

5. Son D, Nakayama K: The process and effects of transformative learning in café-style health communication among health professionals and citizens/patients. 12th International Conference on Communication in Healthcare (ICCH), Amsterdam, the Netherlands, 2014.9.29

６．研究組織

(1)研究代表者

孫　大輔（SON, Daisuke）
東京大学大学院医学系研究科医学教育
国際研究センター・講師
研究者番号：40637039

(2)研究協力者

中山　和弘（NAKAYAMA, Kazuhiro）
聖路加国際大学看護学部・教授
研究者番号：50222170